



Twenty years' follow-up of radiocarpal arthrodesis for rheumatoid wrists

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡林, 諒 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/0002000127

論文審査の結果の要旨

関節リウマチは生物学的製剤やJanus Kinase阻害剤により劇的に疾患活動性を抑えられるようになった。一方で、診療ガイドラインでは薬物治療・保存的治療が無効または不十分で機能障害を持つ関節については関節機能再建手術を検討する旨が記載されている。手関節障害に対しては橈骨手根関節の部分関節固定術等が推奨とされているが、研究が少ないことから弱い推奨となっている。申請者らは本術式の術後長期の治療成績を明らかにするための検討を行った。

新潟県立リウマチセンターの倫理委員会の承認を得て研究が実施された。同センターにおいて橈骨月状骨固定術を施行し、20年以上経過した17例20手について、2019年に申請者が最終経過観察を行って後ろ向きに検討した。評価項目は、疼痛、握力、可動域、C-reactive protein (CRP)、Erythrocyte Sedimentation rate (ESR)、modified Health Assessment Questionnaire (mHAQ)、Disability of the Arm, Shoulder and Hand questionnaire (DASH)、患者満足度、手関節X線像等である。

その結果、疼痛は全患者で消失していた。平均握力は、術前118.8 mmHgが、観察時177.0 mmHgとなり、有意ではないものの増加傾向が見られた。握力は16手で増加し、4手で減少した。患者満足度の調査では、14例17手で満足が得られたが、2例で掌背屈可能域低下により不満であった。そこで、申請者らは可動域の低下を防ぐために、橈骨月状骨固定術に手根中央関節の関節形成術を併用することを始めている。

審査委員会では、関節リウマチへの橈骨月状骨固定術について20年以上の長期成績を初めて報告し、効果と課題を明らかにしたことを高く評価した。

以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者	主査	尾島 俊之	副査	山内 克哉
	副査	五島 聡		